
『無色の虹』

砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『無色の虹』

【Nコード】

N4182D

【作者名】

砂糖

【あらすじ】

夢に破れ、恋に破れたそんな先輩に恋した純情少年の話です。気楽な気持ちで読んで頂けるとありがたいです。BLを含みますが、作者的には普通の恋愛の一つだと考えてます。注：各所、猛烈に手直し中です。

プロローグ 前半（前書き）

同性愛を含みますので、気分を害される方、差別的な方はご遠慮ください。

プロローグ 前半

プロローグ 前半

俺は広行ひろゆきに誘われ。居酒屋で飲んでる。

広行は、バイト先である、レジャービルの先輩だ。

いつも元気いっばいで、何かと、俺に絡んでくる。

「せんばあああ。飲んでまふかあ？」

どうやら、軽く出来上がってきたらしい。

広行は、先輩の癖に、年下という理由で、俺のこと先輩と呼んでくる。

どうやら体育会らしいが、堅苦しいところは無く、いつも笑っている。

「せんばあああ。こないだのあれ見まひいた？ 俺、あいつら
ずきなんでつおー！」

さっきから主語が、あれやそれやこれなので、何の話かまったくわからない。

とりあえず「うんうん」と、相槌うつっているだけで、満足げである。

何がそんなに楽しいのだろうか？

「あ、せんぱい。最近、あれにハマってるんですよ。せんぱいも持ってますかあ？」

あれって何だ？ と、思いつつ、めんどくさいので」「うん」「と、相槌うつってしまった。

さすがに、まずい思ったが、

「やつらああ。お揃いですねえ」

どうやら、喜んでもらえたらしいので、OKだろう。

ふと、時計を見ると、終電の時間になったので、

「広行、帰るぞ」

と、床で寝っ転がってる広行を起こした。

どうやら、まだ飲み足りならしく、渋々とした感じだ。

俺がお会計を済ませると、渋ってる広行を引っ張り、店を出た。

「あつれえええ。せんぱあああ。まだ、お金払ってないでふおお、
ったく大丈夫か？ っと、思いながら、

「あー。俺が、払つといたから心配すんな。それより終電やばい急ぐぞ」

早足で、歩き出した。

後ろから捕まれ広行が、

「いくらですかあ？」

と、聞いてきた。

「まったく、急いでもうとき」。

「ああ。奢りだからきにすんな。それよ……」

ところが、広行がさえぎり、

「だめですよ。俺が誘ったんでふから、払いますよ」

「いいんだよ、俺が年上なんだから」

「でも、俺のがバイトでは先輩ですからあ」

こんなときに限って……

俺はため息をついて、

「じゃー。今度、奢ってくれ！ とりあえず今は急ぐぞ」

と、走り出した。

後ろからゆっくり、広行が着いて来る。

「まってください。俺、もう走れないですよ。」

はあ、なんだってんだ、今日は。

いつもにもまして、めんどくささ倍増に呆れながら、広行にペースに合わせて、駅に向かうことにした。

「マジかよ……」

目の前の終電を見届けると、まるで、コメディードラマを見てるかの様だと、割と冷静な心情でいた。

「せんぱあ。すみませえん」

泣きそうな顔で謝られると、怒るに怒れず、

「とりあえず、タクシー捕まえるぞ」

と、広行をひっぱった。

タクシー乗り場の、長蛇の列に、うんざりしたが、しびしび最後尾に並ぼうとする。

「これ、2時間以上かかるぞ」

と、言って、ため息をついた。

しばらくたって、

「先輩、明日シフト休みでしたよね。なんか用事ありますか？」

夜風にあたって、割とすっきりした広行が、聞いてきたので、

「別に何も」

ため息混じりに答えた。

「じゃーじゃー先輩！！ カラオケ行きませんか？」

と、俺の腕をひっぱり、強引に列を飛び出した。

「ちょ、まて！ せっかくあそこまで、あああああ！！」

俺が戻ろうとしてるのに、聞く耳持たず、といった感じで、強引に俺を引っ張り出す。

「ふざけるな、もう帰る！ 俺はもうクタクタだ！！ 第一俺はカラオケが大嫌いだ」

広行の手を振りほどき、戻ろうとすると、広行が泣きそふな顔で、こっちを見る。

「・・・・・・・・」

「あー！！ わかったよ。行く、行くから！！ 大人が、こんなところで泣くな」

と、広行の背中をポンポンと叩いた。

「本当ですか？ やったあああ！！」

さっきの顔は、なんだ……と、思わんばかりの元気で、俺の腕を引っ張り、カラオケ店へ向かった。

部屋に入ると即効、広行が戦隊物の、テーマソングを熱唱し始めた。一瞬、心の奥がズキツとした。

「お前は子供か！」

軽くつつこみを入れて、とりあえずコーラとジントニックを頼んだ。

「先輩ジュースですか？」

間奏中に広行が、ちゃちゃ入れてきたので「お前の」と、一言添えた。

「俺も酒飲む！！」

と、酒を頼もうとしたので、俺は必死に止めた。

また酔われたら大変だ。

広行はいじけたが、歌が始まるとケロッとしてまた熱唱しだした。

「先輩は、歌わないんですか？」

広行が5曲ほど熱唱すると、曲を入れない俺が不思議なのか、聞いてきた。

「ああ。カラオケ苦手だから」

そう言っつて、空になったグラスを見て、飲み物を頼んだ。

広行は黙っつて、曲を入れると、マイクを渡してきた。

.....?

画面を見ると、それは俺がよく聞く歌手の曲だった。

俺が黙っつて、カラオケの停止ボタンを押すと、広行が怒った顔して、

「何で歌わないんすか！」

と、つつかかってきた。

「だから、俺はカラオケが苦手だつて.....」

そついうと、次は泣きそつな顔して、

「俺ばつつか歌つても、楽しくないじゃないつすか」

広行は、切ない顔をした。

「まだ、酔つてんのか？ そもそも、お前が来たいつてゆつから、俺はついてきた.....」

続きを言おつとした所で、広行が言葉をさえぎり、

「先輩、いつも笑わないつす。職場でも、一人でいること多いし、

俺が何言っても、相槌はつか

で、居酒屋でだって………何がそんなにつまらないんですか？

たまには、元気出してもらおうと

思ってる………」

どうやら、広行は気づいてたらしい。

俺が、あえて誰にも関わらない様にしてる事。

いつからか、本気で笑えなくなっている事。

そして、広行の言動に、適当に、相槌うつてることに。

気づいてたから、妙に俺に絡んできたり、いつも、笑顔でいたりしてたのだ。

今日は意を決して、俺を誘ってくれたのに。

俺が、楽しそうじゃないから、だから、あんなだったのかと。

初めて、こんなに悲しそうな、広行の顔を見た。

俺は黙って、さっき広行が入れてくれた曲を歌った。

久しぶりのカラオケは、ぎこちなかったが、広行は、ものすごくうれしそうな顔をして、

「先輩！！むっさ、うまいじゃないっすか！」

と、はしゃいだ。

お世辞でも、うれしかった。

それから色々歌った。

こんなに楽しく歌ったのは、アイツと以来だなど、ふと頭の中に浮かんで、ズキツとした。

そんな時、広行と一緒に歌いましょうと、一曲入れた。

それは、俺が大好きな歌手の、大好きな歌だった。

いやそれは、あいつが、一番好きだった歌だ。

歌ってるうちに、俺は涙を流していた。

広行に気づかれなないように、顔を前に向けた。

涙を拭きながら、声がかれないように、抑えながら歌っても、涙があふれなく出てきた。

ふと、広行が停止ボタンを押した。

「先輩……大丈夫ですか？」

心配して、顔を覗いてくる。

「ああ。どうやら、飲みすぎたようだ」

と、言い訳をした。

「大丈夫だ。ごめんな」

涙を拭いて、ケロツとすると、広行は、気を利かせたのか、歌い上がったのか、わからないが、某アイドルの、へんてこな歌を、声真似をして歌った。

俺は、その様子を見て、爆笑した。

「笑えるじゃないっすか。」

広行がニヤニヤして、言ってきた。

俺は真っ赤な顔をして、

「馬鹿やる！ 年上をからかうもんじゃない」

そういつて、追加のドリンクを頼んだ。

恥ずかしくて、顔を壁に隠したかったただけだが。

後ろで広行が、

「よし！ 今日はどこん歌いますよ」

と、はしゃいでる。

ほんと、恥ずかしいやつめ。

ひとしきり歌って、休憩してるときに、ふと広行が、

「先輩、こんなにノリがいいのに、何で普段ツンケンしてるんですか？ あ！ 今流行の、ツンデレですか？ 男がやっても、モテませんよ〜」

と、冗談交じりに、聞いてきた。

「別に俺は……どうしてだろうな？」

ごまかした。

「いつもそうですね。先輩、先輩って、自分の事あんまり喋らないっす。俺のこと、そんなに信用できませんか？」

と、真剣な顔をした。

信用とかの問題じゃないと思ったが、やっぱり今日は、酔いが回ってるのか、昔の話が始めてた。

エピソード1 誠一の話その1

小さい頃に、両親と離れ離れになった俺は、親の代わりに、跡取りとして、親の実家で大事に育てられた。

成績優秀は当たり前前の世界の中、特に出来の悪い子だった俺は、小中と先生に目をつけられ、クラスメイトには虐められていた。

家に帰ると毎日のように説教、人一倍負けず嫌いの俺は、何とか1位をとり、周囲を見返してやろうとがんばった。

そのおかげで、高校では地元のそこそこの学校で、1位を取る事が出来た。

俺は、自慢げにその報告をしにいったが、爺と婆は「じゃー。次は、もっといい学校狙いましょうね」と、言って、褒めてくれなかった。

我慢の限界だった。

それから段々と、学校には行かなくなり、部屋に籠る事が多くなった。

唯一の楽しみは、TVのお笑い番組と、PCで、同じお笑い好きの見知らぬ誰かと、話すことだった。

「ねえ。君は、お笑い芸人目指さないの？」

ある子にそう言われて、自然と心弾ませてる俺がいた。

考えもしなかった。

自分がTVの中側の人間になるなんて……。

それから、日増しに、お笑い芸人になりたい欲求は増えていった。

当時は、俺みたいな人に、一人でも多く、笑顔を作ってもらいたいなどと、語っていたが、今考えると、ただ自分を認めてほしかった、だけなのかもしれない。

俺は、部屋に籠ってる時間を、バイトと、お笑いの研究する時間に費やした。

最初反対してた爺と婆は、いつの間にか諦めたのか、高校だけは卒業するという約束のもと、上京を許してくれた。

約2年、上京資金を貯め高校を卒業し、東京へと駆け出していった。

「1番キットカットです。暗転板付きで、よろしくお願いします」

俺は、お笑いの養成学校に入り、コンビを組み、ネタ見せの毎日が続けた。

いつの間にか、つるむようになった大樹^{だいき}と、カズの3人でいつも行動を共にし、それぞれコンビを組み、ネタ見せをする中、美術館や演劇めぐりなど、ネタの参考になりそうなものを探す毎日が続けた。

「なあなあ、やっぱ今一番おもしれーのは、俺らベーコンエッグバ

「力だよな？」

「あほか、ネタの最初に下ネタって入れるコンビが、一番のわけねーだろ！！」

「ええ。おっぱい。おもしれえじゃん。きもちいいし、なあ？」

「ま、男は好きだよな、おっぱい」

「だろ！ 男は好きなんだよおっぱい」

「お前、またカズにいい加減な事を」

「それより、次は水族館いかね？」

「いいねえ」

ネタ見せでは、それぞれウケる事はなかったが、それでも、充実した毎日が続いていた。

「こないだのウツボ、すげえ面白かったな」

「確かに。あれ、山田講師そっくりだったし」

「うんうん。今度お前、あれでネタ作れよ」

「バーカ。俺は怒られるような事はしないの」

「大樹様は相変わらず、堅実ですのう。なあカズ」

「ああ。そつだな」

「なんだお前、元気ねえじゃん。ババアのオツパイって、はしゃいでたくせに」

「まあな」

カズはその日、珍しくノリが悪かった。

「へんな奴。そんな事よりさ、次は上野動物園いかね？」

「水族館と、あんまかわんねえじゃん」

「いあ、あそこ美術館もあるからさ、色々回るつぜ」

「お！ いいね。いつにする？」

「ごめん。俺パス」

初めてだった。

カズが、誘いを断る事など、今まで一度もなかっただけに、俺はたぶん、大樹もだろう、妙に不安だった。

「珍しいな。まさか、彼女でも、出来たんじゃーねーの？」

「うん。実は……」

そのまさかだった。

カズはその後、彼女が出来た経緯と、本気で好きな事。

そのために、お笑いを諦めて、就職する事などを話した。

「ハハツ。お前つまんねーと思ってたけど、まさか、そんなにつまんねえ冗談、言うと思わなかったぜ」

「ごめん。本気なんだ」

「だから、つまんねーって」

俺は、本気でキレ始めた。

「やめろって、カズが本気なら、しょうがねーじゃん！ いつまでも、売れないまま、ダラダラとこんな事するより、真面目に働いたほうが、幸せなんだからよ」

「お前までそんな事……いいのかよ！ 俺らみんなで、お笑いのテッペン目指すって、約束したじゃねーのかよ」

「ごめん」

カズは、申し訳なさそうに言った。

「ごめんじゃねーよ！」

俺は、カズの胸倉をつかんだ。

殴る気はなかったが、気持ちの整理がつかず、どうしようもなかった。

「お前、いい加減にしるよ」

そういつて、俺とカズを突き放した。

「いい加減、現実見るよ！俺らはお前ほど若くないし、賢い生き方しかできねーんだよ」

俺はその時、何も言えなかった……。

自分勝手な事しか思い浮かばず、カズに「おめでとう」の、一言も言えなかった。

次のネタ見せに、大樹もカズも、顔を出さなかった。

その日の俺は、ボロボロで、ウケない所か、ネタも満足に出来なかった。

ネタ見せ終了後、相方に「解散しよう」と言われた。

いつも3人で遊んでた俺は、養成所の奴らに、遅れをとっていた。

どうやらそれが、原因らしい。

M-1が始まる一ヶ月前に、俺はまた……。

一人になってしまった。

プロローグ 後半

あれから、何時間たっただろうか？

こんなに、自分の事を話すのは、久しぶりだった。

普通なら、ウザいと思うような、身の上話を、広行は、真剣に聞いてくれる。

「なんか、カラオケって雰囲気じゃ、なくなっちゃったな。ごめんな」

そういつて、俺は、タバコに火をつける。

「俺は嬉しいっす。なんか少しだけ、先輩の事、わかった気がするっすー！」

と、本当に嬉しそうな顔を、しゃがるから、困ったもんだ。

「もういいだろ？なんか、空気違うしさ」

と言つて、俺が、話を打ち切ろうとすると、

「まだ、最後まで聞いてないっすー！！」

と、真剣な顔で、言ってきた。

「こんな話、聞いても面白くねえだろ。」

「面白いとか、面白くないとかの、問題じゃないっす!」

俺には、こいつの事が、理解できなかった。

なんで、俺なんかの事に、こんなに真剣に、食いつくのか……
・きつと、根っからの、お節介やきなんだな、とか思ったら、少し面白くなって、笑ってしまった。

「なんすか？急に笑い出して、俺なんかついてます?」

広行は窓ガラスで、自分の顔をチェックした。

その姿が、妙に滑稽で、なんか自然に笑ってる自分が、不思議だった。

「もー。なんなんすか!」

子供みたいに怒る姿が、さらに笑いを誘う。

「ごめんごめん。なんか、似てるなって思ってさ」

「誰につすか?」

「いや、こつちの話」

「ほらまた、そうやって……最後まで聞かないと、返さな
いっすよ!」

こりゃ、本当に返してくれなそうだ。

ため息をつくど、広行の熱意に根負けして、俺は、続きを話す事に
した。

エピソード2 誠一の話その2

俺は荒れに荒れた。

養成所にも、行かなくなり、人生どうなってもいいやって、思った時期でもあった。

やることもなく、部屋で、ダラダラとTVを見る時間が、多くなった。

TVでは、相変わらず、元気な芸人さんが、アホな事をして、笑いをとっていた。

なんか、妙に悔しくて、俺はチャンネルを変えた。

それにしても、やることがない。

一人で考え込む事も、多くなった。

「俺は、何しに東京に来たんだ」

もっと、華やかな世界を、期待していたが、現実には、全然敵しかった。

ふいに、カズと大樹が、恋しくなり、電話をしてみた。

二人は、何もなかったかのように元気で、また、みんなで集まって、話すことになった。

気づけば、あの日が、俺の本当の転機だった。

その日は、いつにもまして寒く、東京では珍しく、雪が降る夜だった。

待ち合わせ場所は新宿。

初めて行く俺は、久々にスーツでキメた。

今考えると、田舎丸出しの考えだが。

ドンキホーテ前に着くと、少しサッパリした大樹と、髪を黒くしたカズがいた。

まるで、別人のようで、切なくなった。

大樹とカズが、気が付いたらしく。

俺は小走りで向かった。

「ぶはっ！　なんだよ、お前らなんか……ふっふっふ」

「うっせえ。黒髪じゃねえと、職場のおこぜ顔が、うるせんだよ」

「え！　お前、就職したの？」

「まあな。手取り20万だぜ。すくね？」

「うお！　じゃ、今日はカズ様のおごりだな」

「まだ給料入つたらん！ それに、彼女の、クリスマスプレゼントで、消えるわ」

「あらら。おアツい事で。大樹は、今何してんの？」

「ああ、俺は大学生」

「は！ マジで？ いつの間？」

「まあとりあえず、どっか入ろうぜ。ここさみい」

そういつて、俺らは歩きながら、色々と話した。

居酒屋に入ると、みんなハイピッチで、騒いだ。

「で、大学つて、何さ」

「ああ、俺休学中だったんよ」

「俺らに内緒だったみたいよ」

「え？ なんで？」

「親との約束で、1年だけチャレンジさせてくれって、休学したんだけど、現実をみたらさ」

「え、だって、1年たってねえじゃん」

「なんか、わかつちやっただよね。俺らそうゆうオーラないって、

そういえば、お前は、M-1どこまで行ったん？」

「ああ、俺は2回戦で落ちたよ」

とっさについた嘘だった。

「お、スゲーじゃん。お前はがんばってたもんな。今は特別クラスかなんか？」

「まあな。ちっさいけど、もう舞台の話もあってね」

「おお、マジか！ 見に行くよ」

「うんうん。次いつよ」

「まだわかんないんだよね。また決まったら、連絡するわ。それよりカラオケいかな？」

俺は、耐えられなくなって、話をはぐらかした。

「俺はパス、この後、彼女と約束あんだよね」

「俺も早くレポート書かないと」

「そっか、了解！」

その後、二人は申し訳なさそうにしたが、俺は気にしてないと、二人を駅まで送った。

人間、急に時間があくと、困るもので、とりあえず町をブラブラし

た。

ふと、一軒の飲み屋が気になって、何気なく入った。

あの時、俺の人生はもう一度輝いた。

第一章 オレンジその1

「あつたまいてえ」

気が付くと、俺は、自分の部屋にいた。

「えっと、昨日……なにやってたんだっけ？」

まったく思い出せない。

俺の名前は、まえだひろゆき前田広行ヒロ君・ヒロ坊・ヒー君など好きに読んでくれ。

今は、たてまち豎町パークスって、レジヤールビルで働いてんだ。

今日は久しぶりのお・や・す・み

本当は、ショッピングデートとか、映画館デートとか、公園でまったりデートとかしたいんだけど……肝心の相方がいない。

好きな人はいるんだけど、色々と問題があつて……でも、くじけずアタック・アタック・アタ~~~~ック!! で、頑張ろうかなと、思ってます。

それはそうと、昨日何してたんだっけ？

ま、いいや。

とりあえず、朝食でも作ろうかな。

俺は、布団から起き上がり、時計を見た。

針は丁度1時を指してあり、休みを実感して、ちょっぴり幸せだった。

ふと、台所のテーブルに、何か置いてあるのに、気が付いた。

そこには、一本の栄養ドリンクと、置手紙があった。

「だれだろう？ かーちゃん？ いあ、こっち来るって聞いてないし、他に家知ってる人て……」

頭の上に10個ぐらいの？マークを浮かべ、俺は置手紙を読んだ。

「なにになに？」

『昨日は、色々聞いてくれてありがとう。久しぶりに、人と向き合った気がしたよ。なんか、お前って、不思議な奴だな。一緒にいるだけで、元気もらえるよ。』

「うむうむ。いやあ、照れますなあ。って、俺、なんかしたっけ？」

『まさか、お前があんなに、酒癖悪いとは、思わなかったよ。あ、そうそう、つぶれてたから、勝手にかばんから、鍵を探して、部屋に、上がらせてもらったぞ。』

「酒ねえ。昨日、誰と飲んでたっけ？」

『てか、ゴミぐらい捨てないと、彼女できねーぞ。じゃ、また職場で。by沖野』

「沖野……！！？ そうだったあああああ！！！」

昨日は、先輩と憧れの飲み屋デート（一方的）のあとカラオケデート（一方的）のあと先輩と愛の語り（一方的）をして、そしてそして！！ 覚えてない。

それから、食事どころではなくなった俺は、昨日の事を、真剣に思いつくべく、置手紙との、にらめっこ戦争を、開始した。

え？ 何でかって？ それは、俺の意中の人………センパイの事だからに、決まってんじゃない。

おきたせいいち
沖田誠一 25歳、俺より二つ年上で、背も170cmと俺より背が高い。

え？ 俺は内緒でつ。

黒髪の短髪で、スーツが似合って、クールで理想的。

あとは、あんまり知らない。

先輩は、自分の事、あんまり喋ってくれないんだよね。

そういえば、昨日は珍しく、なんか喋ってた気がする。

お、思い出せない。

その2

結局あの後、俺と置手紙との、にらめっこ戦争は、夜まで続いた。

我ながら、その集中力には、感心する。

先輩の言葉を、一言一句、思い出したのだから。

でも、肝心なその後が、どうしても思い出せない。

結局、先輩は飲み屋で、何があっただらろう？

それが気になって、しょうがなかった。

次あったときにでも、聞いてみようかと、硬く決意した。

「おっはようございませす」

「あ、ひろ君おはよう。今日も元気ね」

「お姉さんも、相変わらず、お綺麗ですよ」

「やだ、褒めても、何もあげないわよ。あ、タイムカード付けておいたから、あんまり遅刻しちゃダメよ」

「さっすが。だから藤さん大好き」

カラオケ受付の藤さんと、朝の挨拶を交わした後、俺は、先輩を探

した。

「えっと、確か今日は、カラオケ担当だったはずだけど………」
「いた!!」

先輩は、タバコを吸いながら、昨日の、来場者数をチェックしてた。

「せんぱああああい」

大好きな先輩に抱きつくと、先輩は懸念顔をした。

「お前なあ。朝っぱらから、何してんだよ」

「相変わらず、つれないっすねえ。おととい、一緒に夜すごしたってゆづのに。」

「あなあ。熟睡したお前を運ぶのに、俺が、どんだけ苦労したと………」

「感謝してますよ。俺は、先輩に愛されてるんだって!」

先輩は、相変わらず煙たい顔をしている。

「おう、仲よさそうだな」

と、チーフが顔を出した。

「おはようございます」

「おはようございます」

笹本チーフ。

先輩と同じ、25歳の若さで、チーフになった、キャリア組の、代表みたいな人だ。

全然偉そうじゃないし、俺は大好き。

先輩ほどじゃないけどね。

「今朝は、お前ら二人に、吉報がある」

「え〜。なにくれるんすか〜?」

「前田は、相変わらずだな」

チーフが、そういつて笑うと、先輩は、少し嫌な顔をした。

どうやら先輩は、チーフの事を、快く思っていないみたいだ。

「それで、吉報というのは、駅前に新しく、レジヤビルが出来るの、知ってるよな?」

「はい。駅前開発の一環として、我が社が今、一番力を入れてるプロジェクトですよね」

「そうだ、そのビルのワンフロアを、前田と沖野、お前らに任せることになった」

「俺困ります!!! やっと此処の仕事にも、なれたばかりだという

の………」

「大丈夫だ。前田がいるし、それに、こないだのお前のレポートが、上のほうで高評でな。これはチャンスだぞ、沖野」

「でも、俺みたいな新人が、こんなビッグプロジェクトに………」

「先輩、大丈夫っすよ。俺がフォローしますから」

「前田もそういつてる事だし、暫く残業が続くけど、まあ、がんばってくれや」

そういつて、チーフが立ち去ると、先輩は、暫く放心状態だった。

俺は、二人の時間が増える事を確信し、心の中で、小さくガッツポーズをした。

「先輩がんばりましょうね」

その3

俺たちは、若者をターゲットにした、レジャービルにすべく、ファッションをメインにフロア展開を考えてた。

しかし、都会の企業を、田舎に呼ぶには、相応の対応を求められるわけで、結構、四苦八苦していた。

残業、残業の毎日で、そろそろ疲れが出てきた、そんな夜。

「せんぱい。そろそろ、休みましようよ」

「もう少しだけ、この企画を完成させれば、きっとあそこも出展してくれるはず」

「そんなに根つめてやっても、いいアイデア、浮かびませんよ」

「でも、俺はもう、逃げたくないんだ」

会話の流れを止めた、その一言が、先輩らしくなく、何か、とても意味があるように、聞こえた。

「先輩、もうって……どうゆう意味ですか？」

「昔の話だ。気にするな。それより続けるぞ」

「先輩。もしよかったら、聞かせてもらえませんか？ こないだカラオケ行った時の、続き」

「お前には、関係ない話だろ」

「関係なくない!!!」

とつさに俺は、叫んでしまった。

先輩は、驚いたように、目をパチクリさせていた。

「関係なくなんてない……先輩と俺は、もうコンビじゃないですか。聞きたいんです。先輩が、何でそんなに、思いつめてるのか……先輩、残してくれたじゃないですか。お前という、元気になるって、あれ読んだとき、俺、スッゲー嬉しくて、うぬぼれかも知れないけど、俺、少しでも、先輩の力に、なれたのになって……それが、スッゲー嬉しくて」

ポロポロに泣いていた。

悔しかったのかもしれない、悲しかったのかもしれない。

俺は結局、先輩の事、何も知らない。

それなのに、打ち解けた気になって、一人で舞い上がってて、もう心の中は、ぐちゃぐちゃだった。

そのとき俺は、ただ泣く事しかできなかった。

「前にも言ったけど、昔俺は、お笑い芸人という夢をあきらめて、ポロポロだったんだ。」

先輩は静かに、懐かしむように、昔の話 시작했다。

その4

「今でも……後悔してるんだ。何で諦めたのかって、たとえ一人になっても、お笑いを、続ける事は出来た。それなのに、俺は、自分に言い訳したんだ。俺のせいじゃない。俺が悪いんじゃないと、周りのせいにして、一人だけ、時間が止まっていた。当時の仲間、それぞれ、自分の道を進んでるってゆうのにさ。あの時、すっごい情けなかった。」

先輩が喋りだすと、俺の涙は、自然と止まっていた。

「それで、仲間と別れた後、俺は急に寂しくなった。そこで、一軒の飲み屋に行ったわけ……何でかわかんないけど、吸い込まれるようにして入ったその店は、決して綺麗ではなかったけど、都会で一人だった俺を、やさしく包んでくれたんだ。カウンターの前で座り、お金なかった俺は、一杯の焼酎を、チビチビ飲んでた。そんな時、その店のママさんが、目の前にボトル置いた。俺は、金がないって言ったんだけど、あたしからのサービスだよって、言ってくれて、そんな時、嬉しくて、泣いちゃってさ……ママさんは、そんな俺を見て、大の男が泣くんじゃないよ！ そう言った後、黙って俺の話……聞いてくれたんだ」

その日、先輩は、色々話してくれた。

そのママの姿に、新しい夢を見た事。

その後、その店に勤めた事。

先輩の勧めで、ギャンブルに手を出した事。

いつしか借金をして、それがどうしようもなくなくなった事。

そして、先輩は逃げてしまった。

それは人生で、2度目となってしまったこと。

まるで、自分を責めるかのようにしながら、先輩は話してくれた。

「だからもう、俺なんかのために、泣かないでくれ。あ、もうこんな時間か、今日は返るか。」

俺は何も言えなかった。

先輩に、どんな言葉かけていいのか………思いもつかなかった。

「じゃ、お前も気をつけて帰れよ。」

そういつて、先輩は背中を向けて、歩き出した。

俺は結局、何もいえないまま、帰路に着いた。

何も知らないで、ただ浮かれてた自分が、すっごい情けなつた。

それから、一生懸命考えた。

わかんないけどただ、一生懸命考えて、そして。

「おはよびいぢいすす」

「あらヒロ君、今日は早いわね。何かあったの？」

「俺、基本まじめですから、藤さん今日も綺麗ですよ」

「うれしいわ。今日もがんばらなくちゃね」

色々考えた挙句、俺が今出来ることは、このプロジェクトを、成功させるしかないと思った。

だから、今までみたいに、いい加減じゃいけないって、俺なりに色々考えてみた。

「先輩は、このプロジェクト。どう考えてます？」

「なんだいきなり、気持ち悪いな」

「真剣に、聞いてるんです」

「すまんすまん。俺はやっぱり、東京のマルイみたく、今、最先端のシヨップに、どんどん入ってもらったほうが、いいと思うんだ」

「先輩、それだと、コストがかかり過ぎると、思うんです。それにはここは、都会じゃない、都会の真似事しても、浮くだけで、もし成功しても、町のよさがなくなってしまい、より閉鎖的になるだけだと、思うんです」

「じゃー、どうすればいいんだ、このままじゃ、若者離れが、増えるだけだ。やっぱり、都会に負けないぐらいに、シヨップ面の強化が、絶対必要だと思う」

「たしかに、ただ、普通のレジヤールビルを作ったところで、いつか寂れていくだけだと思います……都会の真似をした所で、やっぱり都会には、勝てませんよ」

「それじゃ、どうすればいいんだ」

「俺考えたんですけど、夢って、都会じゃないと、見れないんですかね？」

「それって、どうゆう意味だ？」

「俺、思うんですよ。夢追っかける人って、決まって、東京東京ってゆうけど、東京じゃなくても、夢は見れると思うんですよ」

「ん？お前が何が言いたいのか、わからない」

「俺が考えたのは、成功を夢見て東京へ行こうとする、若者に、チャンスをあげようと、思うんです」

俺は、広行の話に、耳をかした。

「つまりは、専門学生に、フリースペースとして、あのフロアを貸し出すんです。」

「ちょっと待て？ それじゃ、利益がないじゃないか？」

「えと、まずは近くの専門学校各校と、提携を結ぶんです。それで、それぞれの学校の学生が、代表して、ブースに出展するんです。そこに企業も参戦させて、お互いを刺激させあい、また、駅前も若者の活性化につながり、ビル自体の活性化につながると、思うん

です」

「ちょっとまで、確かに面白そうだが、そんなに提携してくれる、学校や企業がいるのか？」

「じゃーん」

俺は、一晩かけて調べた、周辺の古着屋や、学校・ブティックなどの資料を、テーブルの上に置いた。

「お前、これ一人で調べたのか？」

「へへーん。俺だって、やる時はやるんですよ」

「ばか。問題はこれからだろ？」

「へ、それじゃ」

「早速今日から、一軒一軒あたっていくぞ」

俺らのプロジェクトは、再スタートした。

その5

先輩と俺は毎日毎日飛び込みで営業をした。最初不審がっていた学校や各店舗も企画の趣旨を説明すると喜んで参加を希望してくれた。

「おい。お前ら調子はどうかだ。」

「あ、チーフもうばつちりですよ。完璧つす。」

「お、それはよかった。企画書のほう見せてくれるか？」

「これです。」

先輩はぶつきらばうに企画書を渡した。その時、何も知らなかった俺は先輩のチーフに対する態度が理解できなかった。

「お！面白そーじゃねーか。これなら上は大喜びするぞ。沖野の案か？」

「チツチツチ。俺の案ですよ。笹本君。」

「お、前田か。お前やるな！」

そういつて笹本チーフは俺の頭を撫でた。その時、先輩がものすごく嫌そうな顔したのを俺は見てしまった。

「それじゃー、そろそろ失礼します。広行行くぞ。」

そういつて、先輩は俺を引っ張りその場を離れた。

プロジェクトが順調に進んで行く中、俺は一つ大きな決意をした。

もし、このプロジェクトが成功したら俺は先輩に告白しようとして、そんな折一つ大きな問題が起こった。学校側が次々と参加辞退のファックスを送ってきたのだ。

「先輩……。今日もまた一校辞退してきました。どうしよう、先輩。どうしよう……。」「

「俺にもまったくわからねえ。当初あんなにノリ気だったのに、今頃になって何だっただくそー！」

「ごめんなさい。先輩、俺が余計なことしなけりゃ。やっぱり、最初の案のほうよかったんですよ。ごめんなさい……。」「

「落ち着け！お前の案はいいよ。まだ、あきらめるな。自体が把握できてない。まずは、先方に話を聞きに行こう。」

「先輩……。」

「だから、泣くな。ほら、行くぞ。」

「はい。」

各学校を回った結果俺たちは現状を理解した。どの学校も問題は保護者側にあったのだ。田舎独特の保守的な考えが有り、保護者の多くが駅前開発自体に快く思っていないらしく。ましてや、我が子がそこに参加することなど認めたくないという親が大勢いたのだ。それで、学校側も評判を下げないため辞退をするはめとなったのだ。

「先輩……。さつき最後の一校からも辞退のファックス送られてきました。やっぱり無謀だったんですよ。」

「ああ。状況はかなり悪い。」

俺達は落胆していた。

「な〜に今にもこの世が終わりそうな顔してるのさ。」

「あ、藤さん……。だって、どうしようもないじゃないですか。」

「まだ終わったわけじゃないじゃない。」

「実際厳しいですよ。対処のしようがありません。」

「も〜。沖野君までそんな事言っちゃって。情けないね〜男子共は。実はこの企画すっごい楽しみにしてるんだけどな〜。」

「えっ?」

「私ね。実は昔、デザイナー目指してたの。でも、親の猛反対食らっちゃってさ。あんたは素敵な旦那さん見つけて結婚しなさいっていわれてね。」

「へえ〜。でも、藤さんいっつも旦那さんの自慢してるじゃないですか?」

「確かに今ではよかったかなって思ってるよ。旦那は優しいし、子供はかわいいしね。でも、時々思うんだ。もし、デザイナーになってたらあたしは今頃どうなってたんだろうってね。後悔してないけど小さなしこりみたいになってさ。うちに年頃の女の子いるのは

知ってるよね。」

「あ、そうだったんですか？」

「先輩知らなかったの？美紀ちゃん、流石藤さんの娘さんだけあつてかわいいんですよ。」

「やだ、ヒロ君こんな時まで、お世辞はいいのよ。」

「お世辞じゃないですよ！」

「アハハ。ありがとうね。それでね。美紀が今、デザインの専門学校行ってるんだ。やっぱ、遺伝子ってやつかな。」

「それじゃ〜。」

「そうなのよ。今回の話、生徒側は大喜びだったの。でも、一部の馬鹿親がさあ。」

「やっぱりそうなんですネ。」

リアルな話を聞いて、俺はたぶん先輩ももうだめか……。と、思った。

「それでね、今、美紀が人集めて著名活動してるんだ。いろんな学校回りながらね。まだ数は少ないけど、だから、あんた達はあきらめないでほしいな。」

……。俺は先輩のほうを見た。やがて、先輩が。

「広行、行くぞ。」

「行くつて、先輩どこへ？」

「ばーか。女の子が足でがんばってるってゆうのに俺らがのんきに座ってるわけいかなーだろ。」

「はい！」

俺達は美紀ちゃんの連絡先を聞くと急いでその場を後にしようとした。

「あんたたちー。」

「はい？」

「やっぱ、あんた達いい男だよー！」

「藤さんこそお綺麗ですよ。」

俺達は口をそろえていった。そして、3人は顔を見合って爆笑した。

その6

「あ、おはようございます。」

「おはようん かわいいね美紀ちゃん。」

「も〜。前田さん相変わらずなんだから〜。」

「始めまして美紀ちゃん。」

ペコリとかわいくお辞儀した。美紀ちゃんは黒の長髪で藤さんそっくりのかわいらしい清楚な女の子。

「あ、始めまして〜。沖野さんですよ〜。」

「え？そういえば広之と美紀ちゃん面識ありげだけど・・・？」

「はい。前田さん、ちよくちよく遊びに来てるんですよ。」

「そそ、ご飯食べさせてもらってるの。」

「お前って奴は、ごめんね。迷惑でしょう？」

「そんなことないですよ。色々楽しいお話聞かせていただいていますよ。前田さんの事とかね。」

「ちよつと、美紀ちゃんそれ内緒〜。」

先輩はそんな俺達のやり取りを不思議顔で見っていた。

「それで、いきなりで悪いんだけどさ、あの、著名活動の話なんだけど。」

「あ、そうでしたね。アハハ、すいません。前田さんと話していると楽しくて、えつと、みんな待ってますよ〜。」

美紀ちゃんに案内されて公園に行くとそこにはたくさんの女の子が道行く人に声をかけていた。

「こんなにたくさんなの。」

「はい、みんな各校の専門学校生で自主的に集まったんですよ。みんな〜。前田さんと沖野さん来たよ〜。」

美紀ちゃんが一声かけると約20名ぐらいの女の子が集まってきた。先輩は圧倒されて絶句している。

「せんぱい。何、照れてるんですか？あ、こんにちわあ。前田広

行です。ヒロ君でよんでね。それで、このおっちゃん、
オツキーってよんでやってね。」

「だ・れ・がオツキーだ！」

「いててて、先輩耳をつねしないで下さいよ。」

「やだー。おもしろい。漫才みたい。オツキーかわいい。女の子
達がキャピキャピしだすと先輩はまた固まってしまった。」

「はいはい。皆あんまりからかつちゃダメだよ。」

美紀ちゃんが皆をうまくまとめて、俺達は今後の方針を少しづつ決
めていった。女の子達は美紀ちゃんメインで地区ごとに分かれて、
今まで道理に著名活動。先輩と俺は二人で美紀ちゃんからの各グル
ープ報告を受けてまとめたり、女の子達じゃ行きづらい企業での活
動や学校サイドへのアタックを続ける方向で固まった。粘り強くア
タックした結果2校の学校が参加を考え直してくれた。著名活動も
相当な数集まってきた。それでも予定より全然少ない数だった。

その7

俺達はできる限りの手を尽くした、しかし、現実はそんなにうまくいくはずもなく結局参加校はたったの2校。ビルのオープンも迫ってきていた。俺達は公園でただ途方にくれていた。

「これが私達の限界ですね……。」
肩を落とすように美紀ちゃんがぼそりと、他の女の子達もみな肩をおとしていた。

「2校だけでも参加してくれるんだ十分だろう。後は企業スペースを増やすしかないな。」

「先輩まで……。まだ時間はあるじゃないですか！ギリギリまでがんばりましょうよ。」

「馬鹿をゆうんじゃねー。これは仕事なんだ。ギリギリまでがんばって、それでオープンまで間に合わなかったら、それこそすべてが駄目になるんだぞ。お前にその責任が取れるのか？」

「それは……。でも……！」

「でもない。悔しいけど、これが大人の事情って奴なんだよ。」

2校は参加できるんだ、彼女達の夢の可能性、それさえも消してしまふ権利は俺達にはないんだ。まだ、スタートもしてないんだ。ふさぎこんでもしょうがないだろ。がんばろうぜ。つな。参加できない学校の子には気の毒だけど皆のおかげで希望の種がまかれるんだ。本当にありがとう。そして力不足でごめんなさい。」

先輩が頭を下げると、美紀ちゃんが立ち上がった、

「そつだよ！沖野さんの言う通り、まだ始まってもないじゃない。そんな気持ちでお店出してもお客さんは喜ばないよ！っさ、元気だそうよ。」

「でも、美紀は参加できないんでしょ。美紀ががんばってたのに私達だけなんて……。」

女の子達の中の一人が今にも泣き出しそうな顔でそう言った。

「何、言ってるのよ。みんなが頑張ってくれたら、私の学校を始め他の学校も参加してくれるかもしれないじゃない。まだわかんないんだから、とりあえず、私達の分までいい仕事してね。」

美紀ちゃんがそういって、その子をなだめた。皆一様に納得したようだけど、泣いてる子、謝っている子、気落ちしてる子などを見ると俺の気持ちも沈んでいった。

「お疲れさーん。おや、皆元気ないじゃん。泣いちゃってる子もいるし。」

笹本チーフだった。

「チーフどうしてここへ？」

「お前達いつもここに集まってただろ。それよりさ、どうしちゃうの？」

「どうしちゃうったのじゃないですよ！結局、たったの2校しか参加許可もらえなかったからそれで……。」

チーフは場違いなほど笑顔で、

「なーんだ、そんなことか。」

「そんなことってなんですかー！！」

先輩がチーフの胸倉をつかんだ。

「おい、なんだ。お前らしくないな。あ、いやこれが本来のお前だったな。」

「だからなんだって言うんだ。お前って奴は……。彼女達の気持ちかわからないのか！あいつの時だって、お前は。お前はー！！」

「おい、沖野はなせよ。あいつの事は今は関係ない。それに彼女達は皆参加できるんだよ。」

先輩は驚いて、手を離れた。

「チーフ。それってどういう意味ですか？」

「前田、そのまんまの意味だよ。」

「でも、学校側の許可が……。」

「それはもういいんだ。フリーマーケット式にするから。」

「えと、あの……。」

「あー。悪い悪い。よくわかんなかったな。前田お前の企画が予想以上にうえにうけてな、それで当初1フロアだったのが2フロアになることになったんだ。それで、レンタルという形をやめて、各自からの寄付金を受け付けてそれで2フロアの維持費にすることになったんだ。」

「寄付金で、そんな誰が。」

「それなら心配要らないわ。」

「お母さん!」

美紀ちゃんも驚いたのも無理はない。そこに現れたのは藤さんなのだから。

「あら、驚かせてごめんね。寄付金の心配は要らないのよヒロ君。」

父兄の皆、そして、各学校や企業の皆で出すことになったのよ。」

「え、それじゃー。」

「そうよ。美紀あんた達、皆自由に出展していいのよ。」

「おかしさんありがとう!」

美紀ちゃんが大喜びで藤さんに抱きつくと、

「お礼なら笹本君に言いなさい。私はたいして何もしてないもの。」

「藤さんそれはいいよ。」

「駄目よ。あなただって頑張ったんだから。」

「えと、それって、どうゆう?」

俺はまだ理解しきれてなくて、藤さんに聞いた。

「実はねフリーマーケット方式を提案したの笹本君なの。この状況を知った笹本君がお偉いさんや地域の方、そして学校関係者・企業、皆を含めた説明会を開いたのよ。そこで一生懸命説得したわけ。」

「藤さん。」

「あら、照れなくてもいいじゃない。かつこよかったわよ。」

「笹本さんありがと。」

「チーフやるじゃん。」

俺を含め皆、笹本チーフに集まりお礼をしてる中、先輩はただぼつんと立ち止まっていた。

「先輩もほら、」

俺は先輩の背中を叩いた。

「チーフ。さつきはすまない。そして、ありがとう。」

「まだ、昔みたいに笹本って呼んでくれないんだな……。」

チーフは悲しそうな顔をした。

「さっきの件は俺が空気読めなかったただけだ、お礼もいい。お前達の頑張りを無駄にしたくなかったただけだし、それにいい企画だったしな。」

チーフはそういってその場を立ち去った。

「さーて。皆。ここからが本番よ。素敵なお店作りしなきゃいけないだから！あ、そうだ。皆でカラオケ行きましょう！とりあえず今日は騒いで息抜きしなきゃね。」

興奮が冷めない皆は藤さんの提案でカラオケに向かった。先輩は嫌がったがみんながオツキーKYといつて、無理やりつれていった。

その後、美紀ちゃん含め女の子達は適当な時間までカラオケを楽しむとおのの帰っていった。藤さんは完全にテンションが上がってしまったらしく、俺と先輩を夜遅くまで居酒屋につき合わすと、娘に怒られるからと言って颯爽と帰っていった。

「せんぱあゝい。藤さんって酔うとあんなになっちゃうんですね。」

「あゝ。意外だな。さすがに俺も酔っ払った。」

「せんぱあゝい。酒づおいつすねえゝ。俺なんかもうボロンベロンですよ。」

「お前は特に飲まされたもんなあゝ。」

「せんぱあい、ひどいですよあゝ。助けてくれると思ったのに。」

「アハハ。すまんすまん。俺もヤバイと思ったから、広行に犠牲になっってもらったよ。」

「もおゝ。ずるいつすよゝ。あつ。」

俺は先輩に気になっただけを聞いた。

「あいつって誰なんですかあゝ。」

「へ？」

「とぼけないで下さいよお。チーフとしゃべってたじゃないですかあ。」

「あ。ま、色々とな。しかし、珍しいやつだなあ。俺の事そんなに気になるか？」

「そりゃそうですお。だって、好きですもん。せんぱいわ俺のことどうおもってんですかあ？」

「俺だって、いい仕事仲間だと思ってるぜ。」

「そうじゃなくてえ。」

「ん？まあ、好きかって聞かれたら好きだろうな。お前明るいな。」

「もお。わかんなひですねえ。そうゆうんじゃないくてえ。」

「お前だいじよ・・・」

俺は先輩の唇を奪った。

その7（後書き）

第1章オレンジはここでラストです。2章からついに恋愛パートのスタート。突然のキス、誠一と広行の関係はどう変わるのか？果たして、プロジェクトは無事うまくいくのか！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182d/>

『無色の虹』

2010年10月8日11時31分発行